

裁判:ドラマと実際どう違う??(テキスト版)

※動画より一部省略等していることがありますので、詳細は動画をご覧ください。

皆さんこんにちは弁護士の山上祥吾です。

今回は固い話ではなくて、よく聞かれる、ドラマと実際の裁判の違いを紹介したいと思います。

・弁護士がうろうろ歩き回る。

アメリカの法廷ものだと、よく、弁護士が法廷をうろうろと歩いてますけど、日本ではあまりやらないです。

ただ、裁判員裁判では、裁判員の前を歩きながら話す人もいます。

これは、大勢の前で話すときのテクニックの1つにアイコンタクトというのがありまして、一人一人の目を見ながら、話しかけるように話すというものなんですが、裁判員6人、裁判官3人いますので、それをやっている弁護士もいる、ということです。

ただ、普段の裁判は、裁判官1人ですから、意味なくうろうろしてたら、多分注意されると思います。

・法廷で激論を交わす。

これも日本では民事訴訟ではまずありません。

日本の裁判は、書類で言いたいことを書いて、裁判所に出します。

なので、激論は書類の中でやっています。

ですので、話すのが苦手な人でも弁護士は全然できます。

・異議あり。

これも普段はやらないものです。

ただ、証人とか当事者を尋問するときにはやることがあります。

一番のパターンは、誘導尋問ですね。

誘導尋問というのは、聞きたい内容を、聞く人が言ってしまっ、答える人に「はい」とか「いいえ」とだけ言わせる尋問です。

例えば、「あなたは、あの日、Aさんを本屋さんで見かけましたか」、「はい」というやつです。

これは自分が呼んできた証人に行うのは原則ダメなので、相手の弁護士から「異議あり」って言われます。

・法廷で急に真犯人が分かる。

これも実際にはないですね。

・事務所がやたら綺麗で豪華

とくにアメリカのドラマや映画でありますけど、実際は、アメリカではシェアオフィスの弁護士も多くて、そんなに事務所にお金はかけてる弁護士ばかりではないです。もちろん、事務所の方針ですので、凄い豪華にしている事務所もあります。

1980年代に日本企業が勢いがあつた時代に、アメリカに進出して、アメリカで裁判に巻き込まれたんです。そう

すると、とにかく勝っても負けても、ものすごくお金を取られたんです。この日本企業の裁判で、当時アメリカの弁護士がすごく儲かったと言われています。

その名残で、とくにアメリカでは、弁護士の事務所がやたら豪華だという印象があるのかな、というのが私の個人的な印象です。